
獄潰し ～Aという小説とBという小説～

雨月

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

獄潰し　　くAという小説とBという小説く

【Nコード】

N4560J

【作者名】

雨月

【あらすじ】

毎度毎度この小説を読んでくれている方が居るのか本当に不安な作者雨月。まあ、別に誰も読まなくてもいいかあ……と、思いつつも誰かが読んで感想をくれることに思いをはせていたりしますが……ああ、そういうばあらすじには百文字程度がいいそうですね。

（前書き）

前書き…多分、読者に対して注意を促すとても大切かつ、はずしてはいけない部分。そういう理由で大切なお知らせ。この小説は作者雨月が見聞ではなく聞いたことのみを参考にして書いたものであり、獄潰しシリーズに出ている時雨、賢治という登場人物たちはある意味看板キャラである。『天道時時雨』というブランドを一時期は持っていたのだがもはや彼の事を覚えている読者が居ることはないであらう……短編小説は単発で……（中略）……ともかく、この小説を笑うことが出来たならばあなたはものすごい人間であるということだ。

Aという小説とBという小説

賢治「ここに実にファンタジーである小説、Aがあるのでしょうか？」

時雨「ふんふん、それで？」

賢治「まあ、説明するのが面倒だから作者もAさんとしておくけどね」

時雨「うん、それから？」

賢治「そして、別にこの小説Aを読んだ一人の作者Bさんを出しておこう」

時雨「はあ……？」

賢治「ここからちょっとややこしくなってしまうかもしれないけど、作者Bさんは作者Aさんの小説を参考にして小説Bを書いた。ま、簡単に言うならば真似て小説を書いたんだ。時代背景、ストーリー、登場人物の性格……そして、誤字脱字のくせまでね」

時雨「最後の奴は真似をしなくていいと思うけど？」

賢治「ま、そこは人それぞれということ……話を戻すけど小説Aはファンタジーな小説だね？そして、それを真似て書いてみた小説Bも勿論、ファンタジーな内容」

時雨「それはまあ、そうだね。真似て書いて他のジャンルは無理なんじゃないかなあ？」

賢治「文章能力としては作者Bさんのほうが作者Aさんよりもよかった……しかし、やっぱり似ている箇所が多すぎるという批判なんかも受けてしまう」

時雨「考えられることだね」

賢治「作者Bさんは勿論、そのことを知っている……実際、真似て書いているのは自分だからね。しかし、その批判を無視したというか……よくある設定ということで流したんだ」

時雨「ははあ、なかなかやるね？」

賢治「そして、気がついてみれば作者Aさんは姿を消してしまった……こうなってしまうたらどうなるかわかるかい？」

時雨「オリジナルが消えてしまった今、面白い小説は作者Bさんだけなんだから……」

賢治「そうだね、とりあえず人気になるってわけ。ま、小説を書く人によって自分が小説を書く理由はそれぞれあるからね。多分、小説Aの作者であるAさんにもっと文章能力があったならば未来は変わっていたのかもしれない……僕はそう思うんだ」

時雨「……そっかあ……そうだったこともあるんだね」

賢治「逆の場合もしかりだよ」

時雨「逆？逆って……」

賢治「真似ていないけど、真似ているんじゃないかって誰か一人でも言ったでしょう」

時雨「ふんふん……」

賢治「小説の信用問題に値することだからね。似てないというか、真似た覚えがないけどとりあえず僕が作者だったらあやまるって思う」

時雨「何で？真似していないんでしょ？謝る必要なんてないよね？」

賢治「確かにそうかもしれないけれど、謝るだけで済む場合よりも無視して何か爆弾を抱えるのはよくないと思うんだ」

時雨「爆弾？」

賢治「そう、爆弾。あの作者は猿真似が多い！とか掲示板に書かれてそれが見事に流行……荒れるとやっぱり精神的なダメージを受けるからね。言葉のナイフが心を抉るのさ」

時雨「ま、まあ……流石にそんなことは起きないんじゃないかな？」

賢治「甘い、甘いよ時雨君……火事はすぐさま火を消して風邪は引き始めが肝心なのさ……打てるときに手は打っておかないと、文字通り後で悔やんで後悔じゃあ、遅すぎるんだよ」

時雨「そ、そうだね……」

賢治「だけどね、この二つの問題には共通点があるんだ」

時雨「共通点？何？」

賢治「どっちも、人気が出なかったら意味がないってこと」

時雨「あ、ああ……そっか」

賢治「赤ん坊が持つ爪楊枝と達人が持つ爪楊枝はぜんぜん違うからね」

時雨「いまいち判り辛い例えだね？」

賢治「ま、もしもこの話を誰かが聞いて何かを思うかもしれない。だけど九割がたそれは自分の中の思い過ごしでそう思う人が多ければ多いほど巷ではこういった話があふれかえっているということなんだよ」

時雨「まあ、確かにそうかもね」

賢治「いつ、どこから、矢が、槍が、弾丸が……飛んでくるかわからないからね」

時雨「そうだね、僕も気をつけておくよ」

賢治「そう、それが一番だよ」

時雨「で、さあ……ちよつと気になったことがあるんだけど？」

賢治「何？まだ注意して欲しいの？」

時雨「これってどこらへんで笑えばいいの？」

賢治「それは………」

時雨「考えて……ないんだ？」

賢治「考えているよ？考えているとも！」

時雨「本当？」

賢治「……次回は『家庭で簡単三分小説』をお送りします♪」

時雨「……それオチ？」

賢治「続けばオチなんて要らない筈さ」

（後書き）

この小説のどこで笑うのだろう？小説を書き終えたアマの小説家である雨月はそう思った。笑えないな：鼻で嗤った後にどうやったらみんなが笑える小説を書くことが出来るのだろうかと一人、デイスプレイ前で考える……が、もちろん答えは出てこない。答えが出ているならば、きっと今頃全世界の人間たちを雨月は笑殺していることだろう。みんなを引かせる小説は書くことが出来るのだが、惹かせる小説は書くことが出来ない小説家、雨月。もう、すぐ前に書いていた『時雨くんシリーズ』も他の小説に埋もれてしまって読み返す気力もない、というか、読み返してみても小学生が書いた小説だと実感。ああ、そういうえば小説を書き出すきっかけとなった人物は高校一年生のときに出会った一人のオタクだったなあ……そう、実感する。もし、あの時出会わなければ、自分はこの道を歩いていることはなかっただろう。この世界にもしという言葉が通用しないことを雨月はもちろん知っている。だから、前を向いて歩くしかないのである。隠れオタクだろうと何だろうと、周りにその気があるとか察知されては居ないのである。ガン〇ム？何それ？ははは、ちょっとわからないなあ……。これでいいのか？と問いかけてくる自分がいるが、いいのである。侍より忍者のほうが好きだから。隠れて過ごす、それが忍者……。もはや、小説となら関係のない話になっていったことによくきづく。おいおい、ここまで読んでくれている心優しい人なんて誰もいないぜえ？いつものようにため息をつく。ため息をつけば幸せが逃げていくといわれているが……不幸は口から漏れたりしないのだろうか？幸せのみが出て行くというのはちょっと酷な話だろう？年始にひいた大吉のおみくじで全部の運を使い果たしてしまったのかもしれない……もうそろそろバレンタインダーのCMとかあるんだろうなあ……ええ、もらったとしても義理チョコですよ。ぎりぎり、義理チョコですよ！誰か嗤ってく

れ！こんな自分を誰か嗤ってほしい……小説家、雨月はバレンタイ
ンデー廃止をここに訴えます……あれ？で、結局どういった話をし
ていたんだっけ？

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4560j/>

獄潰し ～Aという小説とBという小説～

2011年1月28日04時06分発行